

概要書

聴くことに根ざす国際理解教育の研究 —音・ことば・からだの視点から—

横田 和子

本研究では、近代の教育において自明なもの、かつ受動的な行為としてみなされてきた聴くという行為について再考し、その上で聴くことに根ざす学びとはいかなるものかを考察し、更にそれを深化させるために国際理解教育における聴くことに根ざす学びの理論的枠組みの構築を試みるべく、以下の論考を行った。

序章において、まず聴くことと国際理解教育のそれぞれに関する先行研究の検討を行った。「聴く」という行為をめぐっては、哲学・社会学・心理学・教育学・コミュニケーション論・芸術・文学をはじめとする幅広い分野から、その再考を促すべく既に多くの問い直しがなされているが、国際理解教育の変遷を踏まえると必ずしもそうした問い直しに十分に答えてきたとは言い難い。従来の国際理解教育は平和や共生の重要性を説くものの、肝心の「理解」そのものの検討が十分ではなく、人々の抑圧された苦悩を「聴く」ことよりも理念を「語る」ことに重心が置かれてきたと考えられるからである。また、国際理解教育において聴くことが自明視されてきたことは、語ることの本質的な軽視をも意味すると考えられた。聴くことや語ることといった対話に欠かせない本質的な行為を問い直すことは、平和と共生の社会の構築を目指す国際理解教育において、その学びを学習者の身体的な実感を伴ったものにするために欠くことのできない作業である。そこで聴くことに根ざす学びのありようを具体的に検討するため、下記の3つの視点を設定した。

- ①聴くことを軸として、学習者の身体感覚に根ざす学びのあり方を検討する
- ②聴くことを軸として、多様な対象と学習者との関係性を問い直す学びのあり方を検討する
- ③聴くことを軸として、学習者の当事者としての自覚を深める学びのあり方を探る

これらの視点の検討によって、聴くことに根ざす学びのあり方を明らかにし、学習者の当事者性を喚起する国際理解教育の理論的枠組みを構築することを研究全体の目的とした。なお、本論における「聴く」ということばは、いわゆる「聞く」と「聴く」、hear と listen の両者を貫いてある、さまざまな気づきに対して開かれている聴き方、自己の変容のきっかけとなる聴き方という意味で用いている。教育においてはしばしば意識の高さが求められ、いわゆる集中して「聴く」こと (listen) が問題とされてきたが、本研究ではむしろ無

意識とのつながりを重視し、生理的に聴くことのなかにも、気づきや自己の変容、学びの飛翔へのきっかけが潜んでいると考え、そこから従来とは異なる「理解」像を示すことを試みたのである。研究の具体的な方法としては、「聴く」という営みの思想的な考察と、筆者自ら実践者として行った小学校を中心とした出前授業の実践との二つを往還させることで、国際理解教育の理論の構築を目指した。

第1章では「聴く」という行為と学びの根源的な結びつきについて検討した。まず、聴くという行為の媒体として、「音・ことば・からだ」を設定した。聴かれる内容ではなく、聴くという行為自体から学ぶために、これらを媒体として設定した。同じく聴くという行為の対象として「他者・社会・自然」を設定した。そしてサウンドスケープの概念とホリスティック教育の思想を手がかりに、視覚重視に傾きがちな現代社会において聴覚の復権が課題となっていること、聴覚を通した学びが全体性に対する気づきを促していくものであることを踏まえ、「聴く」という行為が全体感覚へのシフトを志向する営みであるがゆえに、聴くことに根ざす学びもまた全体性を重視する学び、ホリスティックな学びとなる可能性を有していることを指摘した。ここでは聴くことの学びが身体感覚に根ざし、聴き手の自覚の強化を促し、かつ聴き手の生きる世界との関係性を問い直す学びとして機能する可能性が示された。

第2章から第4章までは、聴くことの媒体としての「音・ことば・からだ」の3つの視点から、それぞれの学びのありようと可能性を具体的に検討した。

まず、第2章では意味を離れた触覚的な存在としての音そのものがもつ機能に焦点をあて、直観的に感じたり表現したりする学びのあり方を模索した。その結果、音の学びをめぐる以下の視点、すなわち音との出会い、意味からの解放、声という触覚的な存在が持つ意味、なまりが生まれることの意味、からだを経由することの意味といった視点が浮かび上がってきた。また、音を聴くという行為を通して学ぶことが、ことばのもつ意味を前提としないコミュニケーション能力を育む可能性を有していること、音を聴くことを通して聴き手自身の内なる世界や外の世界の多様性を学ぶ可能性を有していることを指摘した。

第3章では主に多和田葉子の言語観を手がかりとしながら、言語学習の動機としての「異質さへの欲望」に焦点をあて、ことばの学びの捉え直しを試みた。その際ことばの響きを触感として感覚的に味わう学びのあり方について検討した。また野口三千三の言語観にも触れながら、ことばの学びをほぐすためのいくつかの視点、すなわちことばの手触りと可変性、ことばの音と質感、更にはことばの創造への参加について論じた。そしてことばと身体のかかわりの再考が、ことばの快楽やことばへの欲望への気づきを促す学びにつながることで、ことばの学びが、学習者その人がその人らしく生きるためのことばの学び、更にことばそのものの生命力の回復にもつながることを論じた。自らのことばの土壌を耕し、更にその世界を豊かに深めていくための、内発的・能動的な学びの契機として、異質さへの欲望やことばを学ぶことそのものが有している快楽と学習者が丁寧につきあいながら、ことばの生命力を回復していく学びを支援していくことが、ことばを聴くことを通した学

びの課題の一つであることを示した。

第4章では野口三千三の身体観、野口体操という身体哲学を主な手がかりとしつつ、からだに根ざした学びのあり方について検討した。脱力やほぐしを旨とする野口体操は、その本質において従来の体育教育のみならず、教育という営みや文化や社会の理解のありようをも問い直すものである。野口の思想における身体理解のあり方は、他者理解や文化理解を考察する上で多くの示唆を与えるものであった。からだの実感、感覚そのものから出発して人間の変革を試みた野口の思想を追うことで、「からだに貞く」という営みが持っている学びの可能性が示された。

第2章から第4章までの考察を通じ、意味や目に見える有用性、競争原理に縛られた近代的な知識・技能獲得型の学習観の限界を指摘し、感覚や直観によってそれぞれの学習観そのものをほぐすことを試みた。そこで改めて第5章では、ほぐした学習観を今一度編み直すことについて論じた。その際手がかりとしたのが「弱さ・遅さ・小ささ」という価値を聴くことである。これらを聴くことはグローバル社会において周縁化されがちな価値を読み替え、そこに新たな価値を見出し、また創造していくこと、更には従来の社会に根強い価値観に対して抵抗していく力を育み変容を迫る契機となる。また、「弱さ・遅さ・小ささ」を聴くことは、その場にある葛藤を抑圧せず、葛藤を浮き彫りにし、葛藤を活かしていくことを模索することを促す。それは強さや正しさを目指す教育ではなく、弱さや脆さに根ざした学びであり、あるべき悩みを悩むようになり、あるべき課題を課題として引き受けていく学びである。更にそのようなプロセスにおいては、焦点化した聴き方のみならず、グローバルな気づきに対して開かれた聴き方が必要とされる。このような聴き方を通して、目に見えないものを聴き取り、既存の価値を問い直し、新たな価値の創造に加担することが、学びの編み直しにつながることを示された。

第6章では聴くことに根ざす国際理解教育の理論的枠組みの提示として、その目標構造及び学習内容と方法を示した。まず、聴くことに根ざす国際理解教育の目標は以下の通りである。

- ①「音・ことば・からだ」を軸に、聴くことそのものを身体レベルで問い直し、身体感覚に根ざす理解のあり方を学び、理解のイメージを拡げること
- ②聴くことを通し、「他者・社会・自然」の多様性、特に目に見えない存在との関係性を学ぶこと
- ③「弱さ・遅さ・小ささ」を聴くことを通し、既存の価値を問い直し、自己や社会が抱える葛藤に気づき、新たな価値を創造する当事者としての自覚を深めること
- ④上記の3つの聴くことの学びを通して、自己の変容と社会の変容のつながりの自覚を深めること

聴くことに根ざす国際理解教育は、知識や能力の獲得よりも、関係性や自覚を重視する

ものである。そのための学びの軸として、まずは①の目標である、「音・ことば・からだ」という聴くための媒体そのものを捉えなおすことが必要である。その際身体感覚や直観など、非言語の持つイメージや、死者や自然などとの「垂直方向」に伸びる対話、目に見えない世界を重視する。また、焦点化とグローバルな気づきの両立した聴き方など、聴くことの多様性への気づきが重視される。次に、②の目標である、「他者・社会・自然」に聴くことを通して、学習者が対象との間に、無数の「聴く―聴かれる」という関係性を結び、それを自覚することを目指す。その際、③の目標にあるように、「弱さ・遅さ・小ささ」を聴くことを通して、苦悩や不都合、葛藤や課題を抑圧せず、それらを活かしていくことにより、学習者の従来の価値観をほぐし、編み直すことをねらいとし、また社会の既存の価値観を肯定・強化するのではなく、それを別の文脈から読み替え、新たな価値を見出し、創造していくことを目指す。そして①から③の目標を通して、④の目標、すなわち学習者の自己変容と社会の変容が繋がっていることの自覚を促していく。学習が、自己の変容だけを目指すのでも社会の変容だけを目指すのでもなく、両者の変容を目指すものであるために、媒体と対象、すなわち自己の身体と世界とは、聴くことによって架橋されねばならない。その橋を支えるのが、身体性・当事者性・関係性であり、それを支える価値が、「弱さ・遅さ・小ささ」なのである。そこに目に見えない大切なことが潜んでいること、それらを知覚することを目指すこと。それが、自己と社会の同時変容を可能にする。聴くことに根ざす国際理解教育とは、聴くことによって、変容可能な自己と、変容可能な社会のつながりの感覚を培うという、身体という媒体のリテラシーを育む教育であるということができる。

聴くことに根ざす国際理解教育において、「音・ことば・からだ」という媒体を用い、「他者・社会・自然」を対象として、「弱さ・遅さ・小ささ」を手がかりに学びは展開する。上記の目標と、その内容・方法とは不可分の関係にある。「音・ことば・からだ（媒体）」「他者・社会・自然（対象）」「弱さ・遅さ・小ささ（視点）」は内容であり、ときに方法でもあり、目標ともなりうるからである。本研究では扱うべき内容としてその大枠を提示した。そして、その内容においては、学習者にとって身近なテーマが、人権、環境、平和といった地球的課題や人類の共通の課題と相互に有機的にからみあい、結びつくことを目指し、そのテーマを通して学ばれる、聴くことの媒体・対象・視点のそれぞれのつながり自体が内容の核であることを示した。学習方法としては、第2章から第4章までに論じてきた身体感覚やイメージの重視、脱力、遊びといった要素が重要となる。感覚やイメージ、あるいは脱力や遊びは数値化できず、目に見える学習の成果として評価しづらいものばかりであるが、それらを疎外しないことが重要な技法となる。このことは、これまでの国際理解教育が強く影響されてきた「何をしなければならないか」という発想から脱却し、学習者＝当事者がもともと持っている学びの力を活かすことが鍵となることを意味している。ここでは実践者の「何をすべきではないか」という視点を戦略的に位置づけることで、学習者の持っている学びの潜在的可能性を引き出そうとする。それは可能な限り予定調和を避

け、学習者ひとりひとりの一回限りの生成的な学びの創造を支援する技法であり、学習者が「無意識の豊かさ」につながることを尊重する学びの技法である。そして「無意識の豊かさ」につながるためには、神秘的な体験や狂気感覚も疎外しないことが重要な技法となる。それなくして、学習者、あるいは葛藤や課題そのものが備えている創造的な変容の可能性を引き出すことは困難であるといえる。

以上の論考を踏まえ、聴くことに根ざす国際理解教育がもつ可能性を、冒頭であげた聴くことに根ざす学びのあり方を検討するための視点からまとめると、以下ようになる。

まず、「①聴くことを軸として、学習者の身体感覚に根ざす学びのあり方を検討する」という点である。聴くことは、意味や内容を聞き取ることだけでなく、五感を使い、想像し、実感し、文脈を聴き、目に見えないもの、ことばにならないものを聴くことである。むしろ意味や内容に焦点化しないことが、さまざまな気づきに開かれるきっかけとなりうる。知識や技能の獲得も重要ではあるが、それはあくまで「理解」の一部分に過ぎない。学びのリアリティーが求められる国際理解教育においては身体レベルでの理解のあり方を捉え直す必要がある。その際の聴き方のポイントは、「焦点化とグローバルな気づき」の両立である。従来の国際理解教育においては焦点化がクローズアップされがちであり、二つの聴き方の両立という側面はほとんど課題とされてこなかった。だが焦点化した聴き方のみを学習の課題とすれば、無意識の豊かさに蓋をすることになりかねない。それでは人間の全体、まるごとのからだに根ざす学びを創造することはできない。無意識の豊かさにつながり、それを深め、広げ、活性化するために、二つの聴き方にそれぞれの意義を認め、その両立を「聴く」という行為から問い直すことの必要性を、本研究は提示した。

次に、②の「聴くことを軸として、多様な対象と学習者との関係性を問い直す学びのあり方を検討する」点である。本研究では、聴くことを軸とすることで、目に見えない存在や選ばれなかったものとの関係性を問い直す学びの可能性について検討した。多様な対象には無生物・死者などが含まれる。国際理解教育は未来志向性を旨とする教育実践であり、そうした声なき者の声への目配りなく、リアリティーのある未来志向性を描くことは困難である。そうした視点から、「聴く」にあたり、「弱さ・遅さ・小ささ」という価値を聴くことを提示した。このような視点を活かすことで、対象の中に自己を見出すことを促し、葛藤を他人事として捉えるのではなく、葛藤を生きる当事者としての自覚を育むことを目指した。本研究では、目に見えないもの、声なき者を疎外せず、それらを聴くという営みから学びを問い直すことで、国際理解教育が従来扱ってこなかった対象を学びの対象に含め、学習者と学習者の生きる世界との関係性そのものの捉え直しにつなげる可能性を示した。

最後に、③の「聴くことを軸として、学習者の当事者としての自覚を深める学びのあり方を探る」という点である。聴くことに根ざす国際理解教育の目的は、努力すれば誰もがコミュニケーション・スキルを磨くことができ、その能力を身につけられ、そうした人間こそがグローバル社会を生き抜けると説くことではない。学習者ひとりひとりのスキルア

ップにより、能力の総和が増えることは、必ずしも社会の変容にはつながらないこと、能力を高めることで、自我を安定させ強化する試みは、十分に行われているが、むしろ国際理解教育で求められるのは、学習者の平和と共生社会の構築のための当事者としての自覚の強化である。自覚を強化するためには、学習者が自らの苦悩や不都合を抑圧せずに聴き取ることを必要とする。それは、他者の苦悩や不都合をわかちあい、それらとのつながりや絆を見出すきっかけとなる。そして他者とのつながりを自覚すれば、自分を縛り他者を縛るのではなく、自分も他者をも解放するように、社会の既存の価値観の変容を促していくことを課題とすることができる。それは、この世界の苦悩や不都合を当事者として生きる自覚を育むためのプロセスでもある。苦悩や不都合に対して細やかなまなざしを向け、それらを聴くことで、自己や他者を縛るのではなく、そこから解放され、別の意味を創造し、生きることを自己と他者に促していく。聴くことに根ざすことで、国際理解教育の学びは個人が能力を獲得するための学びから、苦悩や不都合を生きる当事者として人々がつながりあい、学びあう社会を創造する契機となる可能性を持つといえる。

以上をまとめると、聴くことに根ざす国際理解教育は、聴くことによる、学習者の身体性・関係性・当事者性にもとづく学びを通して、自己の変容と社会の変容を架橋する身体的なリテラシーを育む可能性を持つ教育であると結論づけられる。それは、意識の高さを重視する従来の国際理解教育に対し、身体的な理解、感覚的な理解、そして無意識の豊かさを重視するという方法により、国際理解教育の潜在的な可能性を切り拓こうとするものである。人類全体のグローバルな協働による、新しい哲学が作り出される必要に迫られている現代において、「聴く」ことの深さを学ぶこと、その意味を身体的・感覚的に理解することによって、その新しい哲学の誕生に向け、その誕生への参加を呼びかけ、そして、そのための小さな予兆を聞き逃さないよう、耳を澄ますことを呼びかけるのが、聴くことに根ざす国際理解教育の役割である。

このように、本研究は聴くことに根ざす学びのありようと、それに根ざした国際理解教育の理論的枠組みを示し、その学びのもつ意義と可能性の一端を示し得たと考えられる。主体性や能動性において語られることの多かった教育学において、一見受動的とも捉えられる「聴く」ことを軸とし、それが「語ること」や「対話」をも超えた学びの可能性を含むものとして、国際理解教育の理論的枠組みの構築にあたった点は、本研究の独自性といえる。また、聴くことの対象を、単に音声や言語に留めず、死者や不在の者の声を聴くことも含めて、未来志向の教育を描こうとする点は、抽象的・理念的な学習に陥りやすく、学びの実感が薄いという批判を受けてきた国際理解教育が、まさに生身の人間の本質的な弱さや傷つきやすさ（vulnerability）に根ざしたところから出発しなければならない教育であることを示すことができたと思う。

しかしながら本研究には、以下のようないくつかの課題が残されている。まず一つ目は、本研究が理論的枠組みの提示に留まっているため、聴くことに根ざす国際理解教育の実践的な研究が必要とされることである。二つ目には理論研究上の問題がある。聴くという行

為、また音・ことば・からだを軸とする学びを扱う以上、たとえばそれが身体哲学や時間論とどのようにかかわるのか、そうした概念を国際理解教育においていかに展開させていくことができるか、という点は未解明である。更には、聴くことに根ざす国際理解教育が一般教育学にどのような影響を持ちうるか、その可能性についても検討の余地が残されている。国際理解教育研究を実践・理論の両面で深めるためにも、これらの点を引き続き検討していく必要がある。